

第5回国際スーダン研究会議

The Fifth International Conference on Sudan Studies

栗本 英世

ダーラム大学 (イギリス)、2000年8月29日～9月1日

The University of Durham, 29 August - 1 September 2000

第5回国際スーダン研究会議が、2000年8月29日から9月1日の4日間にわたって、イギリスのダーラム大学で開催された。この、スーダンを対象とする地域研究の国際会議は、3年ごとに世界各地で開催されてきた。先回は1997年にカイロのアメリカ大学で開催されている(本誌7号参照。なお、第3回の報告は本誌5号を参照のこと)。今回の主催者は、ダーラム大学歴史学科、共催者はイギリス・スーダン学会(the Sudan Studies Society of the UK)であった。イギリス=エジプト共同統治領時代のスーダンに在任した行政官など、約300名のイギリス人の公私文書を収蔵する「スーダン・アーカイヴ」を擁するダーラム大学は、とくにスーダン近現代史研究の中心のひとつである。

イングランド北東部に位置するダーラムは、キリスト教の中心地として1000年の歴史をもつ由緒ある都市であり、ダーラム大学はイギリスで3番目に古い大学である。大学は、U字型に湾曲して流れるウェア川に囲まれた台地の上、世界遺産の巨大な聖堂と城砦のあいだのスペースにある。参加者のほとんどは城砦内部と近辺のゲストルームに宿泊し、城砦内の古色蒼然たるホールで3度の食事をとった。こうした環境のおかげで、会議はきわめて親密でリラックスした雰囲気のもとで進行した。ちなみに、会議の参加費は60ポンド、バス・トイレ共用のゲストルーム(朝食付き)は1泊18ポンド、昼食6ポンド、夕食8ポンドであった。

「スーダン—過去、現在、未来」を全体テーマとした会議は、24のパネル(セッション)から構成され、約70の発表があった。そのほかに、会議の幕開けとしてハルトゥーム大学のユースフ・ファドル・ハッサン教授による特別講演、最終パネルとしてレディング大学のピーター・ウッドワード教授による全体総括があった。また、関連行事として、映画上映、音楽のパフォーマンス、スーダン・アーカイヴにおけ

る写真・資料展示などがあつた。参加者は、イギリスをはじめとするヨーロッパ各国、アメリカ、カナダ、スーダン、ケニア、南アフリカ、イスラエルなどからの150余名であった。「長老」のなかでは、アメリカのロバート・コリンズ教授、イギリスのホルト教授が、現役の歴史学研究者として発表していた。先回のカイロ会議では、スーダン政府のヴィザが発給されなかったため、ハルトゥームからの参加者はごく限られていたが、今回は、ハルトゥーム大学から数名の主要メンバーが参加した。日本からは栗本とマイケル・シャクルトン(大阪学院大学)の2名が参加した。歴史学、政治学、人類学の研究者ばかりでなく、ジャーナリストやNGO・人権団体の活動家も多数参加していた。また、イギリスやヨーロッパに在住する北部・南部両方のスーダン人の姿も目についた。

参加者のリスト、発表のアブストラクトと一部の原稿は、ダーラム大学のホームページに掲載されている(www.dur.ac.uk/justin.willis/)ので、関心のある方は参照されたい。

全体的な印象としては、混迷し出口のみえない現在の内戦の状況が、現代政治学や人道的援助のパネルだけでなく、歴史学や人類学、経済学の発表にも色濃く投影されていたことがあげられる。具体的な問題としては、南部に自決権を認めるべきか否か、より根本的には「スーダン人とはだれか」「スーダンとはなにか」という問題は、スーダン人自身だけでなく、スーダン研究者にも突きつけられた抜き差しのならない問いであるといえよう。会議場の内外でホットな議論が繰り広げられたが、スーダン人は、政治的立場、南部/北部、あるいはエスニシティの差にもかかわらず、相互に率直なダイアログをおこなう能力を備えていることを、あらためて認識させられた。そこに、スーダンの「未来」への希望を見出したいと思う。

(くりもと えいせい 大阪大学)